



Title	「子どもとともにする哲学」についての付記
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 9, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/3928">https://hdl.handle.net/11094/3928</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ることに哲学教育の大きなメリットが見い出されている。学校に「飽きている」生徒たちは、哲学の授業で、哲学的な問題を考える仲間がいることを知って喜び、考え、話し、聴くことに「わくわくする be thrilled」。それを動機として生徒は基礎学力と市民としての行儀を身につける。哲学の授業にそういう側面があることは、確かだろう。そして、そういう側面こそ行政にアピールすることができる好材料だろう。しかし、討論で「行儀よく」させることは哲学の目的ではない、という反論があった。結局、市民としての良識を権威主義的に押しつけることになる、と。私も、哲学の「行儀悪さ」に無自覚であったり、避けたりすることには反対である。しかし、そういう「行儀悪さ」が、「わくわくする」ことにつながり、楽しく考え、話し、聴くうちに、生徒が結果的に「行儀よく」なることも事実である。そういう経験を経ないで身につけられた「行儀よさ」に、私は脆さを感じる。哲学の「行儀悪さ」と市民としての「行儀よさ」は必ずしも矛盾しないと考えるべきではないか。

初日の夕方、オスロの実践家の自宅で歓迎会があった。閑静な住宅地の一角にある普通の住宅だが、庭にバーが開かれ、バンドが演奏し、屋内外に歓談の輪ができた。空はいつまでもほの明るい。私は奥の書斎でオスロの実践家と話した。古い家具が据えられた落ち着いた感じのその書斎で、カウンセリングを行うこともあるという。このオスロの街で、彼らは比較的最近哲学プラクティスを始め、地道に活動している。私は、SDには可能性を感じるが、哲学カウンセリングに対

しては懐疑的であると話すと、「どこが違う？」と聞き返された。どちらも対話の一種ではないか、と。なるほど、とも思うが、やはりいろいろ疑問が残る。合衆国の哲学カウンセリングの第一人者マリノフは、すでにニューヨーク市立大学で哲学カウンセリングの講座を開講している。哲学カウンセリングの創始者アーヘンバハもまた、近くベルリンとミラノの大学で哲学カウンセリングの講座を開講するという。いったいどのような教育が行われるのか、たいへん興味深い。

(てらだとしろう)

### 「子どもとともにする哲学」 についての付記

教育に関する臨床哲学の活動は、大阪府立福井高校での授業など、「子どもとともにする哲学」に重なる部分があり、世界の「子どもとともにする哲学」関連のプラクティスには以前から注目している。しかし今回の特集では「子どもとともにする哲学」についてまとめて報告できなかった。そこで寺田報告に付記したい。

近所の子どもたちを集めての「哲学クラブ」(ノルウェー)

ノルウェーの二人の男女(Schjelderup と Olsholt)が、「子どもとの哲学的対話 ノルウェーのアプローチ」というタイトルで、子どもたちと行っている「哲学クラブ」について発表した。発表者は、近所の10歳から15歳の子どもたちを週に一度、自宅に集めて、哲学の対話をしている。「哲学クラブ」のねらいは、子どもたちと、様々な哲学的問いを不思議がり、その探究を楽しみ、面白がることだ。そしてこれは、アメリカ合衆国の「子どものための哲学」の先駆であるリップマン(Matthew Lipman)と「子どもの哲学研究所」(Institute for the Advancement of Philosophy for Children)が、デューイに依拠して、哲学を、子どもたちが自信を持ち、社会的に適應するのを助ける道具と考えることへの疑問表明でもある。発表者は、ソクラテスの対話のような真理の探究こそが哲学だと主張した。

質疑では、「哲学クラブ」の実際の様子話題になった。子どもたちは時間を忘れて議論に熱中することもあるが、走り回ったり、年上の子と年下の子や、男の子と女の子の間でいろいろな思惑が働いたりして、純粹に哲学的対話を楽しむのはなかなか難しそうだった。

発表を聞いて、子どもたちと哲学するこんな身近なやり方もあるのかと思う一方で、もし自分が日本でやるとして、一体どんなクラブ名を付けて、近所の親たちにどう説明し、子どもたちを誘ったら、子どもたちが集まるかはかなりの難問だとも思う。また、発表者が強調する真理の探究が、哲学プラクティスでよく

言われる生き方としての哲学とどのような関係になるのか、よくわからなかった。

大学と小学校教員との協同プロジェクト(ブラジル)

ブラジルで心理学を専攻する大学院生(Juliana Mercon Lestani)が、彼女の関わっている、大学と小学校教員との「学校での哲学」協同プロジェクトについて発表した。このプロジェクトは、大学の哲学と心理学と教育学が組み、5つの小学校の教員たちと行って、3年目になる。このプロジェクトで発表者は、大学と小学校教員とのつなぎ役(Mediator)として、小学校に通って教員の授業をビデオに撮り、授業の計画や評価を教員と議論してきた。また小学校の教員たちは定期的に大学に行き、哲学の学習会や、授業についての研究会をする。発表者は、自分が関わった一人の教員へのインタビューから、このプロジェクトを通じて教員に生じた人間関係などの変化と新たに生じた困難をまとめていた。

学校に哲学を導入するためにこのようなしっかりしたプロジェクトが行われていることに私は特に驚いた。またこのプロジェクトの特徴は、まず教員が哲学的なものの見方を身に付け、教育活動のなかで生かすことをねらう点にあると思う。学校で子どもたちとの哲学を進めるには、教員との協同作業が欠かせないことをあらためて思った。さらに、質疑の途中で発表者が「実際はいつも混乱している」と言い、これに参加者たちがうなずいて共感したのも印象に残っている。

(あいざわくにこ)